

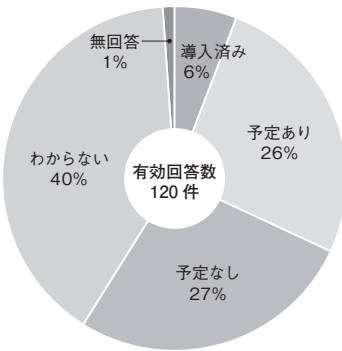
瀬戸内海の《島ワーケーション》事情

株式会社 SETOUCHI SEAWIND 小西智都子

緒に就いたばかりの《島ワーケーション》

コロナ禍以降、ワーケーションという言葉が耳にする機会が増えました。「働きながら旅をする」なら、瀬戸内の島はぴったりだと思いう反面、受け入れ側の実態に関するデータはほとんどありませんでした。そこで昨秋、原直行香川大学教授の協力を得て、瀬戸内海の島々を対象としたワ

《ワーケーションの導入意向》



出典：瀬戸内の島しょ部における「ワーケーション」実態調査（香川大学経済学部「原直行研究室調べ」）
※グラフは調査結果をもとに筆者作成

象としたワーケーションに関するアンケート調査を実施しました。調査対象は、東瀬戸内エリアの島の宿泊施設四〇〇軒。

宿泊施設が多い兵庫県淡路島では約一〇〇軒を独自抽出し、香川県の有人島、岡山県笠岡諸島、しまなみ海道（広島県・愛媛県）と愛媛県上島町の島々は全施設を対象としました。

集計の結果、回答者の七割がワーケーションを「知っている」または「聞いたことがある」と答えたものの、導入については、四割が「わからない」と回答。「導入済み」はわずか六パーセントで、「予定あり」を含めても三割程度にとどまっていました。導入を躊躇する理由としては、条件が合わない（価格、部屋数、常連客の志向など）、高齢のため対応困難、島のインターネット環境が悪いなどに加え、導入方法がわからないといった声も多く、Wi-Fi環境は整えたけれど、何をどうすればいいか手探り中というのが実情のようです。

さらに特徴的だったのは、宿の規模です。客室数は「一〇室未満」が約六割、宿泊料金は大人一人「一万円未満」が九割で、ゲストハウスや民宿など、小規模な宿が大半を占めていることがわかりました。淡路島や小豆

島のような大きな島には一〇〇室以上の観光ホテルがあり、会議室やコワーキングスペース、大型モニターなど都市部並みのテレワーク設備が整っている施設もありますが、点在する小規模宿をどう生かすかが、瀬戸内の島ワーケーションの課題と言えるでしょう。

一方、体験メニューについては、約半数が「ある」「予定あり」と回答。釣りやトレッキング、野菜や果物の収穫体験など島の自然や暮らしを体感できるプログラムが充実しており、「規模は小さいけれど、地域に密着し、柔軟な対応が可能」という強みも見えてきました。

島ならではのユニークなワーケーション

調査をもとにヒアリングを進めると、島の利を生かしたユニークなワーケーション事例がありました。

香川県女木島^{めぎしま}では、砂浜を丸ごとオフィスに立てた「ビーチオフィス女木島」を展開。もともと海水浴客が多いこの島では、海の家を兼ねた宿が砂浜に隣接しており、



ビーチオフィス女木島。

約三〇〇メートルの砂浜全体に広域Wi-Fiを整備することで、お店でポータブル電源とビーチチェアを借りれば、どこでもテレワークができます。

島外者にとつての異日常を、「働き方をメンテナンスする」場として提案するのは兵庫県淡路島の「Workation Hub 紺屋町」です。通常のコワーキングやシェアオフィス利用に加え、独自の働き方測定サービスを設け、自分らしい働き方の探求を後押ししています。関西からのアクセスが良く、都市住民が定期的に自身の働き方を見直すために通えるようになっており、ノマドワークや二地域居住など、新しい島滞在の推進も視野に入れています。

七〇〇超の島を抱える瀬戸内海で、人が住む島は一三〇島ほど。その約六割が人口一〇〇人未満で、高齢化は深刻な状況です。一方、ワーケーションは観光とは異なる新しい来島動機を喚起し、観光の島以外にもチャンスを与えてくれます。大規模な展開は難しいかもしれませんが、小粒でもピリリと個性が光る瀬戸内流の《島ワーケーション》に期待したいと思います。

小西智都子（こにしちづこ）

香川県高松市出身。瀬戸内海専門の出版社「ROOTS BOOKS」代表。瀬戸内の島々を扱う雑誌『せとうち暮らし』を2007年に創刊、島関連の書籍やガイドブックなどを多数手がける。2019年には瀬戸内海の島旅専門の旅行会社「株式会社SETOUCHI SEAWIND」を設立。小型チャーター船を使ったアイランドホップを提案している。